嵐牛 友の会便り 第十三号

2018.3.25発行

〒436-0004
掛川市八坂434-1
嵐牛俳諧資料館
伊藤鋼一郎

携帯番号
090-1472-2972

Eメールアドレス
takumise@
titan.ocn.ne.jp

目　次

[1]嵐牛のめざした
俳諧の世界がだいぶ
解ってきました
伊藤鋼一郎
[2]連句について――
龍巣院茸狩の半歌仙
紹介を兼ねて（補遺）
倉島利仁
[3]講読・鑑賞の会
今後の予定
[4]嵐牛俳諧資料館近影

嵐牛の目指した俳諧の世界がだいぶ解かってきました

伊藤鋼一郎

嵐牛は東遠州地方で活躍した俳人で、俳句の世界で有名だったと我が家では口伝されてきました。嵐牛、洋々以降、我が家では俳人は途絶えていたことも知っていました。我が家だけでなく、所謂蕉風俳諧は明治なかごろより低迷していったようです。

明治三十年頃、正岡子規は「連歌形式の俳諧」の文学的価値を否定しました。また嵐牛等が詠んでいた発句に代わり俳句という呼称を唱えました。先日、ＮＨＫの子供向け番組でも、芭蕉は俳句を詠んでいたのではないと言っていました。正しく嵐牛は俳諧の連歌（連句）、発句の世界にいたわけで、俳句を詠んでいたわけではなかったのです。連歌と俳諧、発句と俳句の違いは友の会でも話に出ましたが、友の会便りを読んでいただいている皆様には、これからも知識を深めていっていただきたいと思います。連歌で一番目に詠む句（五七五）を発句といい、二番目は発句を受けて詠む句（七七）で脇といいました。発句は連歌一巻を代表する句として重んじられ、発句だけで独立した作品として詠むようにもなりました。嵐牛は人生の後半を俳諧を中心にすごしたようですが、仲間とともに連句を巻くのと並行して、多くの発句を詠みました。この発句が、現代の俳句に変わって行ったのです。

嵐牛は若いころ、卓池の門人として愛知県東部に度々出かけ、卓池同門の俳友と連句を巻いていたようです。連句は複数の人たちが一つの場に寄り合って行うものなので「座の文芸」と言われており、その場で創作し、そして他人の句を鑑賞しながら再び創作、これを繰り返しながら共同で一つの作品を創作します。個人で詠むものではなく、知識を持ったものが集団で詠みあうもので、決まり事も多く、現代人にはなかなか難儀です。正岡子規は芭蕉の業績を全面的に否定したわけではなく、芭蕉の句は説明的かつ散文的な要素が多く含まれており、詩としての純粋性に欠けていることを難じたようです。嵐牛の句も、芭蕉と同じ様に感じられます。俳句は物事の客観的な描写が重要で、視覚的なものになり、且つ簡素なスタイルを持つようになり、現代人に受けているようです。現在俳句を楽しんでいる方は、時代背景などをご理解いただいた上で嵐牛らの作品を鑑賞してください。

念願の『嵐牛俳諧資料集』も、何回かの校正を済ませて校了となり、発行日も三月三十一日と決まりました。加藤先生、倉島先生の御努力で、四月末頃にはご希望の方にお届けできそうです。嵐牛友の会及び友の会便りは、嵐牛を顕彰することを目的とし、且つ『嵐牛俳諧資料集』を世の中の大勢の方に知っていただくための組織でもあります。お受けいただける方は部数などご連絡ください。四月の友の会での申込で構いません。少数印刷で少し高めですが、一部五千円でお願いします。目次を同封しますのでご覧ください。

四月の友の会は、一月の友の会で話に出ました、**磐田市立中央図書館**（磐田市見付三五九九-五）での**「遠州の俳諧」展**に出向くこととしました。嵐牛関係の資料も展示され、**講演**、**展示の説明**がありますので、奮ってご参加ください。**四月十四日(土)**第二土曜日で**参加料は無料**です。掛川市以外の方は現地集合とします。近くの方で誘い合って参加ください。参加者は人数の把握をしたいので御一報ください。掛川市内の方は当嵐牛資料館から車を出しますのでご連絡ください。人数によりますが、今のところ車二台で十三人までとし、一台目は嵐牛資料館、二台目は市内二、三箇所のご希望のところを巡回しようと考えています。市内以外でも地理に疎い方、車の運転に自信がない方は当資料館に来ていただければ送迎しますので、奮ってご参加ください。正午零時に嵐牛俳諧資料館を出発予定です。（「嵐牛・友の会」会長）

連句について
――龍巣院茸狩の半歌仙紹介を兼ねて（補遺）

倉島 利仁

一月二十一日(日)に行われた嵐牛友の会では、「連句について――龍巣院茸狩の半歌仙紹介を兼ねて」と題して話をさせていただきました。友の会では発足以来『嵐牛発句集』を講読していますが、嵐牛の俳諧活動は発句詠作だけではありません。『嵐牛俳諧資料集』の編集が進む中で、発句詠作の他にも、多くの仲間や弟子との連句創作、俳文創作、月並句合の評、一枚摺の作成など、嵐牛の俳諧活動が多岐に亘ることを改めて実感させられました。中でも、嵐牛俳諧資料館に三十点ほど遺される『俳諧どめ』に記録された連句作品は、嵐牛の俳諧活動の中心となるものと考えられ、その意味と重要性を友の会の会員の皆さんに知っていただきたいと考えたためです。また、『友の会便り』十二号では「柿園友垣抄（十二）」の中で「たけがり記」と題された資料を紹介しましたが、安政六年(一八五九)九月二十一日に嵐牛を招いて岡崎の龍巣院の裏山で茸狩が行われたその日、茸狩に参加した連衆で巻かれた半歌仙を紹介したいと思い、これを題材とすることにしました。友の会の当日は、加藤先生を初め会場の皆さんから、読みや解釈の誤りなどについてご指摘をいただき、誠にありがとうございました。また、友の会の後、いくつかのご意見やご質問を寄せていただきましたので、それらを紹介するとともに補足説明を加えたいと思います。

まず、連句の基本的ルールについて確認しておきます。会員の方から、「連句は言葉の連想により紡ぎだされた小さな物語の集まりと理解して楽しめば良いでしょうか？」とのご質問を受けましたが、その通りでよろしいと思います。ただし、前句と付け句で一つの世界を作り、同時に打越と前句で作られた世界から離れるのが連句の基本的なルールですので、例えば、脇から四句目にかけてを「秋祭りでさぞかし若い人たちは楽しんでいるだろう」と考えたり、八から十三句目を「素顔を自分に見せた可愛い女と不義密通で夜明け前に駆け落ちした」と解したりと、三句以上に亘って一つの世界や物語を解釈するのは正しくありません。脇と第三とで作られた世界は、四句目が付くことで脇の内容から離れ、新たな場面に転じられていくのがルールです。「三句のわたり」とも言いますが、打越・前句・付句の三句による場面や内

龍巣院に茸狩を催せし節

1 香に一日延れ歩行や木の子山　嵐牛
2 葛の末葉の裏見せる月　貫一
3 さら、、とをどりの跡を片付て　青嘉
4 耳の遠いはをかしみのある　四山
5 大さうな改め前の船荷嵩　知碩
6 一むれづゝに下りる青鷺　岳丈
7 川骨の茎の水錆を洗はせて　椿谷
8 分別してはおけぬつり棚　四山
9 いつも名をかりる手紙の上封　燕居
10 素顔に興のさめるそばかす　嵐牛
11 けさあたり旅立したる揃ひ笠　知碩
12 切戸は砂に吹くらむなり　青嘉
13 月代のわたる方より雁鳴て　椿谷
14 焼米舂のどこもいち時　知碩
15 紺浅黄縞せんさくの秋仕着せ　柳翫
16 連歌が済で奥はひつそり　、
17 包まれた松をのり越す花明り　静嘉
18 蜑の神を祭る三寸錫　初白

容の変化が重要なのであり、打越と前句の付合の世界から場面を大きく転じるのが連句の原則だということをご確認いただきたいと思います。その上で、次のような感想をいただきましたのは、大変ありがたいことだと思います。

個人の思いを作品にのせる現代の俳句と違い、連衆のお互いの生活感、知識・教養を共有しながら、予測不能の物語を大勢の仲間で一緒に紡ぎだす喜びというのは、まちづくり（人と人との輪と和）の必要性が言われている現在、急速な近代化のため人と人のつながりが個人にバラバラにされてきた明治以降の歴史を経て、少し立ち止まる必要がでた今、再評価すべき文学形式かなと、大変面白く講義を伺いました。

次に、具体的な付け合いの解釈について確認します。まず脇について、友の会では「葛の末葉の暮見せる月」と読んでいましたが、『俳諧どめ』の記録や字体から「暮」は「裏」と読むべきでした。発句と脇においては、一日中茸狩に興じて山中を歩き回りすっかり夕暮れになってしまったことを詫びる内容だと思いますが、第三が付いた場合は、月の光が葛の末葉を白く照らす月夜の景と解すべきでしょう。当日ご指摘いただきました通り、一般に盆踊りは夜行われることが多く、盆踊りが終わった後の夜遅くの景となります。

知碩の五句目については、次のような質問をいただきました。

作者の知碩は敷地内に蔵があるくらいの福田の大地主とのことですが、名主などの村役人として米を税金として納める業務に苦労もされていたのでしょうか？　領主に米を納める方法として一旦郷蔵に収めた米を領主の指定で江戸の札差に送らねばならない、船までの運送は農民の負担と聞きましたが？　すると、その作業にあたった村役人は指定通りの米を届けたという確認を領主代理人から得るために苦労されたのでしょうか？　当時の人々の生活実感体験に基づき、おかしみがあり、深刻な話をあまり深刻にならず、どこかヒョウとして軽みを持ちながら詠んでいるということでしょうか？　「耳の遠いはおかしみのある」人を意地悪い人ととって、それとの折衝に苦労している真面目な名主の姿は、何となく時代劇の一場面を思いださせるような気がして質問する次第です。

「福田の大地主」というのは晴笠のことかと思われ、また当時の年貢米の扱いや名主らの役割についてなど、今はっきりと返答することができませんが、「当時の人々の生活実感体験」を「深刻にならず」に表現していることは間違いないでしょう。こういった「おかしみ」の感覚こそ俳諧らしいところだと思います。ただし、作者の経験をそのまま詠んだと考える必要はなく、それらはあくまでも連衆に共通する生活感覚だと考えるべきだと思います。

十二句目についての質問です。

当時の大店の構造を知らないのですが、店の御嬢さんと雇人が密かに駆け落ちをしようとすると、どの切り戸から出るのでしょうか？　この切り戸から出ると世間の冷たい風にさらされることになるぞ、しかし二人は揃い笠で旅立ちしようとしていると「けさあたり旅立したる揃い笠／切戸は砂に吹くらんなり」を解釈することは可能でしょうか？

「切戸」については、私も「門扉などに設けた、くぐって出入りする小さい戸口」と解していましたが、友の会当日、これは地名と解すべきとのご指摘をいただきました。『好色五人女』巻三「中段に見る暦屋物語」、所謂おさんと茂右衛門の物語の中で、二人が駆け落ちし、「やうやう日数ふりて、丹後路に入りて、切戸の文珠堂に通夜してまどろみしに」という場面があります。「切戸の文珠堂」は京都府宮津市、天の橋立の南にあり、「橋立の松の風ふけば、塵の世ぢやものと、なほ止む事のなかりし」という場面を踏まえた表現とも考えられます。揃い笠で旅立つ二人から、おさん茂右衛門の物語を通して風の吹き付ける今戸の風景を連想するのは、この場の連衆にとって自然なことだったと思われます。

十四句めについて、友の会当日のレジュメでは「春」を「うす」と読んでいましたが、これも『俳諧どめ』にある通り「つく」と詠むべきだとご指摘をいただきました。ありがとうございます。前句との関係については、秋の空の景に季節の農作業を付けたと解しましたが、「焼米春が農作業であるかも悩むところです」との御指摘をいただきました。

種籾として保存してあった米の芽が出て、芽が出てしまうと炊いても不味いので焼米にして、保存食、あるいはおやつとしたということであります。籾を撒き終わり、種籾が不要になり余るのはどこも同じ頃のことで、焼米つきも同じ頃のことでしょうか。

「焼米」をつく理由や、当時の人々にとっての「焼米」のイメージが大変よく分かり、貴重なご指摘に感謝申し上げます。

連句の解釈には、発想の前提となる当時の生活感覚や、連衆に共通する知識や教養など、現在となっては容易に知り得ない部分も多く、難しさもありますが、それを読み解く楽しさも大きいと思います。今回、ご意見やご質問を寄せていただきましたことを感謝するとともに、今後も様々ご教示くださいますようお願いいたします。

（「嵐牛・友の会」幹事補佐）

講読・鑑賞の会　今後の予定

第十六回　四月十四日(土)

会場　磐田市立中央図書館
時間　午後一時三十分～四時三十分
内容　寺田良毅先生の講演拝聴
　　企画展「遠州の俳諧」見学

※　通常と日程、会場が異なりますのでご注意ください。
詳細は巻頭の会長の文章をごらんください。

第十七回　六月十七日(日)

会場　嵐牛俳諧資料館和室　八畳＋六畳
時間　午後一時三十分～四時三十分
内容　石川依平「宇津の山越」講読
　　「嵐牛発句集」講読　ほか

※　友の会に対するご要望などをお聞かせください
また、友の会会員の方、その他嵐牛繋がりで面白いこと
がありましたらご投稿ください。

山茱萸　（さんしゅゆ）・白木蓮

三月十一日　友の会会員（鈴木敏子様）よりお花を頂き、早速花器に
この黄色のお花は、あの『ひえつき節』で歌われている♪庭のさんしゅ
ゆのき♪である事をお教え頂きました。樹の花の美しさ　その生命力に
暫し見とれて

平成三〇年三月一六日　　撮影　事務局　伊藤英子